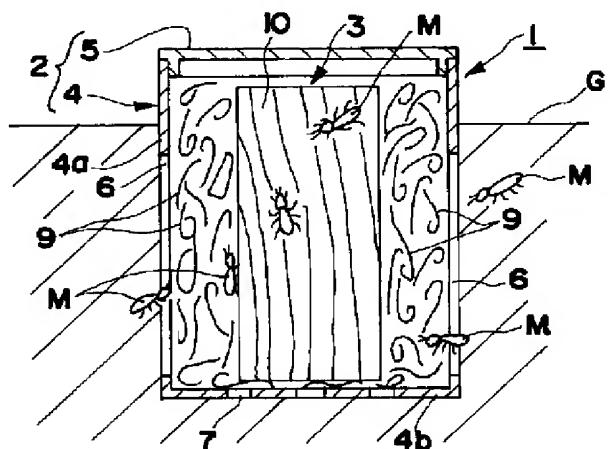


(11) 実用新案登録番号

(24)登録日 平成8年(1996)8月14日



【実用新案登録請求の範囲】

【請求項1】 白蟻が出入り可能な開口部を有する容器内に、白蟻が好む材料からなる白蟻誘引材を収納してなる白蟻生息検知器。

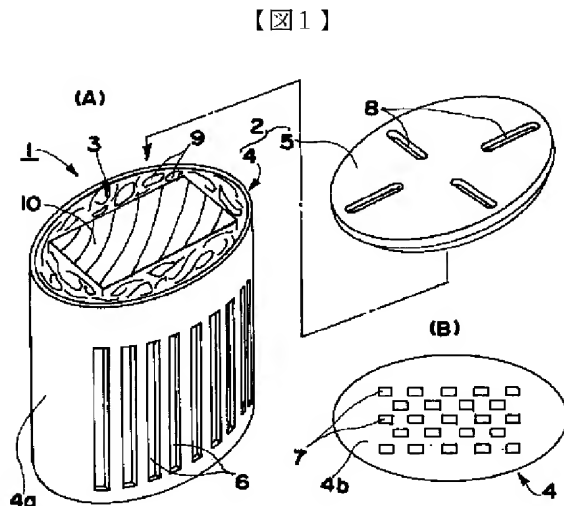
【請求項2】 白蟻誘引材は、松材あるいは樺材の削り屑及び又はブロック片からなる請求項1に記載の白蟻生息検知器。

【請求項3】 白蟻誘引材は、松材あるいは樺材の削り屑及び又はブロック片にフェロモン剤等の化学的誘引物質を添加したものからなる請求項1に記載の白蟻生息検知器。

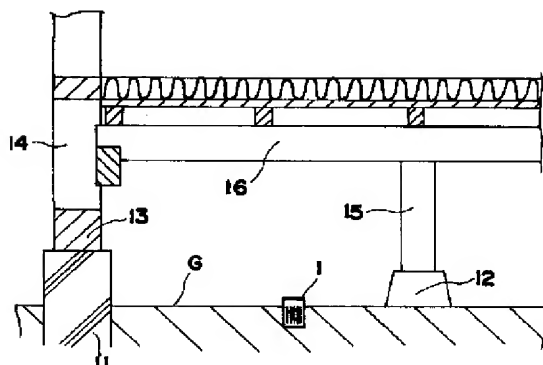
【請求項4】 容器は、有底筒状の容器本体と、容器本体に着脱可能に被着されるとからなり、容器本体の周壁部及び底壁部に白蟻が出入り可能な多数の孔を開口し、蓋体に空気孔を開口してなる請求項1～3のいずれかに記載の白蟻生息検知器。

【図面の簡単な説明】

【図1】 (A)は本考案の一実施例を示す白蟻生息検知器の分解斜視図、(B)は同白蟻生息検知器の底面図である。



【図3】



【図2】 同上の白蟻生息検知器の縦断面図である。

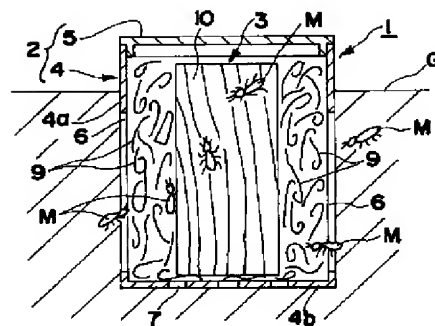
【図3】 建物（家屋）の床下構造を示す断面図で、特に本考案の白蟻生息検知器の設置状態を示している。

【図4】 同上の白蟻生息検知器と共に使用される白蟻調査表を示す図面である。

【符号の説明】

- 1 白蟻生息検知器
- 2 容器
- 3 白蟻誘引材
- 4 容器本体
- 4 a 容器本体の周壁部
- 4 b 容器本体の底壁部
- 5 蓋体
- 6 孔（開口部）
- 7 孔（開口部）
- 8 空気孔
- 9 削り屑
- 10 ブロック片
- M 白蟻
- G 床下の地面

【図2】



【図4】

17

白 蟻 調 査 表		
施工年月日	年 月 日	係員
調 査 年 月 日	白 蟻 生 息 状 況	調査員
年 月 日		
年 月 日		
年 月 日		
年 月 日		

【考案の詳細な説明】**【0001】****【産業上の利用分野】**

本考案は、建物の床下等に設置して、白蟻の生息を検知し、白蟻による被害を未然に防止できるようにするための白蟻生息検知器に関する。

【0002】**【従来の技術及びその課題】**

日本において建物に被害を与える白蟻のほとんどは、ヤマトシロアリやイエシロアリと呼ばれる地下生息白蟻で、地下から水分や餌を求めて広く行動する。これらの白蟻は木材を好み、例えば図3に示すような地面Gから建物の布基礎11や束石12等に這い上がって、土台13、束14、15、大引16等に侵入し、それらを食い荒らす。しかして、一般に家屋の建築時には、床下の土壌、及び土台13、束14、15、大引16等の地面から一定高さ（例えば1m）以内の木材部分に薬剤を散布するなど、化学的処理による白蟻食害の予防工事を行っているが、建築後例えば5～6年が経過すると、当初の薬剤の予防効果が薄れあるいは消失し、白蟻が床下の土壌に生息し始め、被害が発生することが多い。

【0003】

ところで、従来では、建物の床下等での白蟻の生息状況を検知する手段がなく、従って白蟻が土台、大引、束等を実際に食い荒らして少なくとも被害がある程度進行して始めて、実際に白蟻の被害を受けていることを知るというものであった。このように白蟻被害が発生したならば、直ちに化学的処理による白蟻駆除工事を行わなければならないが、その被害の進行状況によっては取り返しのつかない場合も多々ある。

【0004】

本考案は、上記のような事情に鑑み、建物への被害が発生する前に白蟻の生息を検知して、白蟻による被害を未然に防止できるようにするための白蟻生息検知器を提供することを目的とする。

【0005】**【課題を解決するための手段】**

請求項 1 に係る白蟻生息検知器 1 は、白蟻 M が出入り可能な開口部 6, 7 を有する容器 2 内に、白蟻 M が好む材料からなる白蟻誘引材 3 を収納してなることを特徴としている。

【0006】

請求項 2 は、請求項 1 に記載の白蟻生息検知器 1 において、白蟻誘引材 3 は、松材あるいは柾材の削り屑 9 及び又はブロック片 10 からなることを特徴としている。

【0007】

請求項 3 は、請求項 1 に記載の白蟻生息検知器 1 において、白蟻誘引材 3 は、松材あるいは柾材の削り屑及び又はブロック片にフェロモン剤等の化学的誘引物質を添加したものからなることを特徴としている。

【0008】

請求項 4 は、請求項 1 ～ 3 のいずれかに記載の白蟻生息検知器 1 において、容器 2 は、有底筒状の容器本体 4 と、容器本体 4 に着脱可能に被着される蓋体 5 とからなり、容器本体 4 の周壁部 4 a 及び底壁部 4 b に白蟻 M が出入り可能な多数の孔 6, 7 を開口し、蓋体 5 に空気孔 8 を開口してなることを特徴とする。

【0009】

【実施例】

実施例について図面を参照して説明すると、図 1 の (A) は、本考案に係る白蟻生息検知器 1 を示す分解斜視図、同図の (B) は底面図であり、図 2 は縦断面図で、この白蟻生息検知器 1 は、白蟻 M が出入り可能な開口部を有する容器 2 内に、白蟻 M が好む材料からなる白蟻誘引材 3 を収納してなるものである。尚、この実施例の白蟻生息検知器 1 は、大きさの程度を寸法で示せば、例えば高さが 8 c m、楕円形の長い方の幅が 8 c m、短い方の幅が 6 c m 程度のものである。

【0010】

上記検知器 1 について詳細に説明すると、容器 2 は、横断面が楕円形状で有底筒状の容器本体 4 と、この容器本体 4 に着脱可能に被着される蓋体 5 とからなるもので、容器本体 4 の周壁部 4 a には、白蟻 M が出入り可能な開口部、即ち縦長スリット状の多数の孔 6 が開口形成され、また底壁部 4 b には、図 1 (B) に示

すように白蟻Mが出入り可能な多数の矩形状孔7が開口形成されている。蓋体5には、図1(A)に示すように、容器本体4の周壁部4aに形成されたスリット状孔6よりも細いスリット状の空気孔8が複数箇所に開口形成されている。

【0011】

上記容器2内に収納される白蟻誘引材3としては、図1及び図2に示すように、松の木あるいは米国産の榎(とが)の木を比較的薄いチップ状に削り取った所要量の削り屑9と、上記松の木や米国産榎等から容器本体4に十分余裕をもって収容できる大きさの矩形状に切り取ったブロック片10とからなるものが好ましい。あるいは、これら削り屑9及びブロック片10にフェロモン剤や薬剤等の化学的誘引物質を添加したものでは、より一層誘引効果がある。上記削り屑9及びブロック片10を容器本体4内に収納するには、図示のように底部側に少量の削り屑9を置いた状態で容器本体4中央部にブロック片10を挿入配置し、ブロック片10の周囲空間部に削り屑9を配置すればよい。

【0012】

上記削り屑9は、松の木あるいは榎の木の大鋸屑(おがくず)や所謂鉋屑でもよい。また、この白蟻誘引材3としては、削り屑9のみ、またはブロック片10のみをそれぞれ単独で容器本体4内に収納するようにしてもよいが、実施例のように削り屑9とブロック片10とを併用して収納した場合には、削り屑9は、比較的短期に腐り易く且つ湿潤し易いため、白蟻Mにとって好都合で、白蟻Mを容器2内に効果的に誘引することができ、またブロック片10は、容器2への収納が容易になると共に、木の香りを長期間持続できるため長期にわたり白蟻誘引効果を維持することができる。また、ブロック片10は1個に限らず、複数個に分けて収納してもよい。尚、白蟻誘引材3として、上記松等の木材以外に、フェロモン剤や薬剤等の化学的誘引物質を単独で使用することもできるが、これらの化学的誘引物質を前記したように上記松等の木材に添加して使用する方が有効である。

【0013】

上述したような構成を有する白蟻生息検知器1の使用においては、白蟻の予防及び駆除工事を行う業者あるいは関係者が、この白蟻生息検知器1を図3に示す

ように家屋の床下に設置する。この白蟻生息検知器 1 の設置にあたっては、床下地面 G に所要大きさの穴を掘って、白蟻生息検知器 1 を、容器 2 の上端部が地面 G から容器 2 全体の高さの 4 分の 1 程度突出するように埋め込んで、図 2 に示すような状態に設置する。この場合、地下生息白蟻 M は、地面 G から約 10 c m 以内のところに生息することから、その範囲内に白蟻生息検知器 1 を埋め込んで設置する必要がある。

【 0 0 1 4 】

しかして、上記のように各家屋の床下に設置した白蟻生息検知器 1 を、業者等が定期的に点検して回り、白蟻 M の生息状況を調べる。この点検にあたっては、容器 2 の蓋体 5 を外して内部を確認すればよいし、場合によっては容器 2 全体を引き上げてもよい。図 2 は、ヤマトシロアリやイエシロアリと呼ばれる地下生息白蟻 M が、白蟻誘引材 3 の削り屑 9 やブロック片 10 に誘引されて容器 2 内部を徘徊しながら、それらの削り屑 9 やブロック片 10 を食している状態を示したもので、業者等が白蟻生息検知器 1 を点検に来た際に、容器 2 内部に白蟻 M が入っていることを確認できたならば、この白蟻生息検知器 1 によって、白蟻 M がその床下周辺に現実生息していることが検知されたことになる。

【 0 0 1 5 】

上記のように白蟻生息検知器 1 によって白蟻 M の生息状況が検知されたならば、業者は直ちに、その建物の床下の土壌、更には床下地面から一定高さ以内の木材部分に対して、化学的処理による白蟻駆除施工を行い、床下土壌内部に生息している地下生息白蟻 M、あるいはその地面から建物に侵入しようとしている地下生息白蟻 M を徹底的に駆除することができ、それによって白蟻 M による建物の被害を未然に防止することができることになる。

【 0 0 1 6 】

図 2 に示すように床下の地中に設置された白蟻生息検知器 1 において、容器本体 4 の底壁部 4 b に開口形成された多数の穴 7 から地中の水分が容器本体 4 内の浸入し、白蟻誘引材 3 の削り屑 9 やブロック片 10 を湿潤させ、やがて腐食させることになり、それによりその削り屑 9 やブロック片 10 が地下生息白蟻 M にとってより好適な餌となる。そして白蟻 M は、主に、容器本体 4 の周壁部 4 a に開

口形成された縦長スリット状孔 6 より出入りするが、上記底壁部 4 b の穴 7 より出入りすることもできる。また、蓋体 5 にも穴 8 が開口してあるため、容器 2 内に入った白蟻 M が窒息死することがない。

【 0 0 1 7 】

また、家屋の床下に設置した白蟻生息検知器 1 の点検にあたって、業者等は、図 4 に示すような、建物の施工年月日、調査年月日、白蟻生息状況、調査員等の記載欄を設けた白蟻調査表 1 7 を用意し、この調査表 1 7 を、床下の検知器設置箇所近辺に貼付しておくか、あるいは家主に保管してもらっておき、点検の際に、この調査表 1 7 の上記各欄にそれぞれ所定事項を記入していくようにすることにより、白蟻食害に対する家屋の予防、管理をより有効に行うことができる。

【 0 0 1 8 】

【 考案の作用及び効果 】

請求項 1 によれば、この白蟻生息検知器の使用においては、白蟻の予防及び駆除工事を行う業者あるいは関係者が、この生息検知器を建物の床下等に設置し、そしてこの白蟻生息検知器を業者等が定期的に点検して、白蟻の生息状況を調べる。業者等が白蟻生息検知器を点検に来た際に、容器内部に白蟻が入っていることを確認できたならば、この白蟻生息検知器によって、白蟻がこの検知器周辺に現実に生息していることを検知されたことになる。こうして白蟻生息検知器により白蟻の生息状況が検知されたならば、業者等は直ちに、その建物の床下の土壌、更には床下地面から一定高さ以内の木材部分に対して、化学的処理による白蟻駆除施工を行い、地下生息白蟻を徹底的に駆除することができ、それによって白蟻による建物の被害を未然に防止することができる。

【 0 0 1 9 】

請求項 2 によれば、白蟻誘引材は、松材あるいは樺材の削り屑及び又はブロック片からなるものであって、松材や樺材は白蟻にとって大好物であるため、容器内に白蟻を有効に引き寄せることができると共に、この松材や樺材は入手が容易であり、きわめて安価に提供できるものである。また、削り屑は、比較的短期に腐り易く且つ湿潤し易いため、白蟻にとって好都合で、白蟻を容器内により効果的に誘引することができ、更にブロック片は、容器への収納が簡単容易に行える

共に、木の香りを長期間持続できるため白蟻誘引効果を長期にわたり維持することができる。

【 0 0 2 0 】

請求項 3 によれば、白蟻誘引材として、松材あるいは桧材の削り屑及び又はブロック片にフェロモン剤等の化学的誘引物質を添加したものを使用することにより、白蟻の誘引効果がより一層良くなる。

【 0 0 2 1 】

請求項 4 によれば、容器が、有底筒状の容器本体と、容器本体に着脱可能に被着されるとからなるものであって、白蟻生息検知器を地中に埋設状態に設置する場合、これを点検する際には、蓋を取り外すだけで内部を確認できるから、点検が容易となる。また、容器本体の周壁部及び底壁部に多数の孔を開口形成しているから、地下生息白蟻がそれらの穴から容易に出入りすることができ、しかも地中の水分が上記底壁部に孔から容器本体内の浸入して、白蟻誘引材、特に削り屑やブロック片を湿潤させ、それらを容易に腐食させることになり、それによりその削り屑やブロック片が地下生息白蟻にとってより好適な餌となり、誘引効果を一層高めることができる。